

Title	鎌原雅彦氏による「伝統的な心理学の中のこども」報告（2014年度第2回<児童>における総合人間学の試み研究会）
Author(s)	田澤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :49-51
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5269
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archive

2014年度第2回〈児童〉における総合人間学の試み研究会 鎌原雅彦氏による「伝統的な心理学の中のこども」報告

2015年1月12日の教職員研修会の後、本年度第2回例会が開催された。児童学科の鎌原雅彦氏による「伝統的な心理学の中のこども」と題する報告に、参会者一同、年の初めの知的刺激を楽しんだ。

いうまでもなく、児童学の起りは心理学に多くを依拠している。19世紀末のアメリカで展開された児童研究運動の祖は心理学者ホールであったし、明治期の日本に児童学を紹介したのもホールのもとに留学した心理学研究者たちであった。

鎌原氏は、2年前に児童学科に着任される際に、学科の教員が鎌原氏の主著『やさしい教育心理学』（有斐閣）について「この本は子どものせいにならない立場で書かれているが、それは筆者の特性か、心理学の特性か」と質問したことに応じて、心理学の経緯をたどりながら、心理学の諸説における子どもの捉え方について整理された。以下は、報告の概要である。

一般に、行為者の失敗を、観察者は行為者に責任を負わせて捉え、行為者本人は環境要因を考えるように、その要因分析にはズレがある。外から見る観察者は、出来事に関してその人に原因があると考える傾向にあり、それに対して当事者は、原因を外部の環境的などころに求めていく。心理学とは基本的には後者の立場と思われる。本当にそうなのか。心理学の歴史をたどり、伝統的な心理学の流れを踏まえうえで2～3の実験例から子ども理解を探りたい。

ヴント（Wundt）が1879年にライプツィヒ大学で実験室を開設したのが、実験心理学の始まりと言われる。ヴントの内観心理学は意識を扱ったが、後にワトソン（Watson）が意識を扱うことを批判し、行動主義の心理学を1913年に発表した。意識はその人自身にしかアクセスできない主観的なものなので、科学的な心理学は全ての人に観察可能な表出されたもの—行動—をもとにつくり上げるべきだと主張して、行動が取り扱われる時代が長

く続いた。これは「意識なき心理学」と後に批判をうけ、1960年代に認知革命が起こり、ナイサー（Neisser）が1967年に「認知心理学」を提起したが、そのころからまた人間の頭の中のことを問題にするような心理学に変化した。このように、意識を問題にしていたヴントの内観心理学、それから行動主義、認知主義という流れがあり、認知心理学から現在までまた50年ぐらいである。

一方で、児童心理学・発達心理学の流れは別になる。発達心理学は、進化論のダーウィン（Darwin）が自分の子どもを観察したことに始まると言われる。次いでホール（Hall）は、ヴントが実験室を立ち上げたときの留学生で、アメリカに帰ってウィリアム・ジェームズとともにアメリカの心理学の祖と言われる人物だが、児童研究運動を始めた他、青年心理学や宗教心理学の祖とも言われている。これらの発達心理学の系譜は、先述した伝統的な心理学の流れとはほとんど関係ない形で発展した。ホールの児童学は、個人差を研究する心理学の流れの影響を受けていると考えられる。1970年代ぐらいに「赤ちゃん学革命」と呼ばれるように、乳幼児を対象にした実験的な手法が開発されて、実



上段：鎌原雅彦教授（発題者）

験的な研究が多く行われるようになると、伝統的な心理学の系譜と発達心理学との間にかなり交流が見られるようになった。

ヴントは、例えば、条件A「音がしたらできるだけ速くキーを押しなさい」、条件B「音をはっきりと知覚したらキーを押しなさい」とすると、常にBのほうがAよりも0.2秒時間がかかるということを見つけ出した。条件Aでは感覚として音を聞いたら押す、一方でBは頭の中でその音が何の音かがわかったらキーを押す。頭の中に「鉄の玉」等の音のイメージができるのに0.2秒かかる。このように、人間の意識の中で起こる非常にプリミティブな過程に目を留め、各々の要素の組み合わせで人間の意識が構成されていることを明らかにしようとした。この作業には、自己の内部に起こっている感情や判断を自身で観察する内観が必須だが、これは子どもにはできないのでヴントの心理学は子どもを対象に想定していない。したがって、ホルの児童学とヴントの心理学は多分、関係はない。

ワトソンが提唱した行動主義の基本は、パブロフの条件づけの考え方である。ワトソンは乳幼児の感情に関心があり、乳幼児を観察し、乳幼児には恐怖と怒りと愛の三つの感情があると述べた。ワトソンの弟子のジョーンズ (Jones) は、同様に条件づけの考え方を使って、2歳10か月児のウサギに対する恐怖を取り除く実験をした。ここで試行したのは、ウサギに対して弛緩する反応の条件づけである。人間は好物の喫食時にリラックスするので、対象児が好きなものを食べているときにウサギをかごに入れて遠くから見せることを繰り返して、遠くからウサギを見ても落ちついていられ恐怖が抑えられる状況とつくりながら、徐々にウサギのかごを近づけ、近くにウサギが来てもリラックスできるように考えた。この1924年の実験が、条件づけを使った行動療法の考え方の始まりである。

行動主義者は動物などを対象に基本的な行動の

学習の原理を研究したので、乳幼児は実験対象として馴染みやすかった面がある。行動主義者にとって、子どもは、条件づけられる受動的な存在として存在する。

行動主義の終わりの頃、セリグマン (Seligman) らが、犬を使った電気ショックの実験で、無気力は経験によって獲得されると明らかにした。自分の行動と結果との間に関連性がない「非随伴性」の経験は「何をやってもだめだと思うからやらない」という無気力な認知スタイルを生み、回避学習を阻害することが発見された。次いで子どもを対象とした実験で、「ちょっと頑張れば嫌なことを避けられる事態でもやらなくなるのは、その人が自分は何をやっても結果は変わらないという考え方を持っているからだ」という結果が実験的に確かめられた (Licht & Dweck)。また、苦手な課題をトレーニングする際に、毎回成功する条件と、成功がベースで時々失敗し失敗したときは自分のやり方に問題があることを強調する条件では、後者において多少の困難にも粘り強く取り組む結果を得た (Dweck)。その後、自己決定することと学習効果の関連性をみる実験 (Iyenger & Lepper) では、圧倒的に、条件の自己決定が内発的な動機付けを高め、課題の好成績につながる事が証明された。

行動主義の後、認知心理学が主体になったが、認知心理学の発想でいえば人間の知識はネットワークになっており、知識の獲得は新たなネットワークの構築を意味する。新しい知見をもって新たなネットワークを形成するためには、既に持っている様々な知識が活性化される必要がある。子どもが持っている知識はそれぞれ異なるので、教師が全員に同じことを伝えても、同じようにネットワークができ上がるわけではない。ネットワークをうまく作り上げるためには、受動的に話を聞く場面でも子どもの側の能動的な活動が必要になり、能動性がある初めて知識が獲得され定着していく。学習場面での自己決定は、能動的な活動

を促進し、それによって学習自体が促進されると考えられている。

つまり、子どもを受動的な存在としてイメージする行動心理学に対して、認知心理学ではもう少し子どもの主体的な活動が重視される。

(文責：田澤 薫 [たざわ・かおる] 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授)